

教養総合Ⅰ 訪越雑記

～日本国際学校との交流を中心に～

大 島 誠 二
齋 藤 晃

〈キーワード〉日本国際学校（JIS） ハノイ 教養総合

はじめに

本校の「教養総合Ⅰ」の授業の一環として、2022年10月24日から29日まで、高校2年生22名とともにベトナムのハノイを訪問した。この「教養総合Ⅰ」は、教員が設定する13～14講座に分かれており、原則としてフィールドワークを授業内に取り入れることになっている。ハノイ訪問は、講座「国際化と日本」のフィールドワークとして実施した。この講座は、生徒に日本社会と国際社会の意識の違いの有無や、「国際化」の意味を考えさせる目的で、今年度初めて開講した。フィールドワークの対象としてベトナムを選んだのは、近年労働力として日本を訪れるベトナム人が増えており、日本に対する関心が高い国となっているからである。また、日本から進出している企業が多く、異国での日本人の活動を知る機会になると考えたことも理由であった。

1. 出発に至るまで

1学期の授業では、日本企業の海外での活動や海外の多国籍企業の活動、訪日外国人の現状把握、技能実習生の問題などを、新聞記事などから紹介し、外国人を受け入れる日本人の意識や実態について生徒に考えてもらった。またこうした問題を調査する場合、どのような資料が必要なのか、資料をどのように扱えばよいのか、といった考察の手法についても触れていった。

2学期前半は、10月末にベトナムのハノイを訪問する研究旅行が予定されているので、生徒に各自テーマを決めてもらい、ベトナムについて調べ学習をさせて発表を行った。またフィールドワークの機会であるので、現地でのどのようなことに着目してフィールドワークを行うかを考えさせた。

ハノイ訪問では、二つ目的があった。一つは現地校を訪れ同世代の高校生と交流を行うこと、もう一つは、ハノイに駐在している日系企業を訪れ、その活動ぶりに触れることである。

現地校については、本校の牧野良介教諭が4月より教員研修制度を用いて、ハノイの日本国際学校（Japanese International School 略称 JIS）に1年間の予定で赴任していたので、JISを訪問校とした。JISは、現地のベトナム人子弟を対象とした幼稚園から高校までの一貫校で、Dao Xuan Hoc 理事長によって2016年に設立された私立学校である。ベトナム語の他、英語教育、日本語教育に力を入れ、小学校から英語、日本語の授業が行われ、カリキュラムも、英語中心のコースと日本語中心の2コースが設けられている。年齢が上がると、語学だけでなく他教科でも英語や日本語での授業が展開されている。インターナショナルスクールの扱いであるが、他のベトナムの高校生と同じく、高校卒業認定試験を合格すればベトナムの学校の卒業資格が与えられる。今年度は12年生、日本でいう高校3年生まで初めてそろい、2023年7月には初の卒業生を送り出すことになっている。

JISと中央大学との関係は深く、開校後、中央大学理工学部の山田正教授（現名誉教授）が初代校長に就任しており、また中央大学の国際連携校協定の締結校第1号となっている。我々が訪問する直前の9月4日には、大学のハノイ駐在員事務所がJISの中に開設された。

我々は4月以降、JISに赴任した牧野教諭と連絡を取り、訪問前からオンラインでJISと本校を繋ぎ生徒間の交流を図ることとした。コロナ禍前は、海外の学校とのオンライン交流はハードルが高いように感じていたが、ここ2年間のオンライン授業の経験などで、一気に身近なものとなっていた。オンライン交流会は、計4回、授業の中でZoomを用いて行った。内容は、5月30日「お互いの学校紹介」、6月21日「ベトナムの紹介」、6月28日「日本の紹介」、9月27日「ハノイ市内案内」と、それぞれテーマを設けて実施した。海外との交流は、日本人にはどうしても言語の壁の問題が付きまとうが、JISの生徒は日本語を学習しているので、交流は基本的に日本語を用い、時折英語が混じる状況で、実質的な意思疎通が図れた。オンラインによる交流は、親近感という点では限界があるが、それでも事前にお互いに知り合いになったことで、ハノイ訪問後の交流がスムーズに展開できたと感じている。

もう一つの目的である日系企業訪問は、JISを通じて「鉄建建設」をご紹介いただいた。「鉄建建設」は、もともとは鉄道に係わる関連施設の施工を行っていた企業であるが、近年は鉄道関連施設だけでなく、道路や橋梁、下水道施設など幅広くインフラ整備の施工に従事している。ハノイでは下水道整備事業に携わっており、ご厚意によってその現場訪問が可能となった。

この研究旅行は、本校ではコロナ禍の影響が残る中で、久々の海外旅行の復活であった。コロナ対策として、旅行中の発病を防ぐ観点から、参加者には出発前にPCR検査を義務づけた。ベトナムの出入国には何の規制もなかったが、当時ベトナムから帰国する際には、3回のワクチン接種証明か、帰国前の72時間以内にPCR検査を受け陰性を証明する必要があった。数名の参加者が3回のワクチン接種の規定を満たしておらず、ハノイでPCR検査を受けることになったので、牧野教諭を通じてJISに検査の手配を依頼した。

2. 研究旅行の概要

研究旅行の概要は、次の通りである。

日次	月日	曜日	時間	用件	移動手段	生徒宿泊	教員宿泊	食事	
1 日目	10/24	月	15:00	成田空港第2ターミナル集合	バス	ウィンダムガーデンホテル		夕食:機内食	
			18:00	JL751便搭乗					成田発
			21:50						ハノイ ノイバイ空港着
			22:30	空港からホテルへ移動					
2 日目	10/25	火	8:10	ホテルより徒歩でJIS到着	徒歩10分	ホームステイ	JIS教員宿舎	朝食:ホテル内 昼食:JIS食堂 夕食:ホームステイ	
			8:20~8:50	Anh副理事長・遠山校長から歓迎のご挨拶					
			9:00~9:50	JIS校内見学					
			10:05~11:50	絵本読み聞かせ・体験授業					
			12:00~12:30	給食体験					
			13:00~14:50	スポーツ大会					
			15:15~15:40	記念写真・ホストファミリー対面					
15:50	ホストファミリーとともにホームステイ先へ移動	バディと移動							
3 日目	10/26	水	7:50	バディとともに登校	バディと移動	ホームステイ	JIS教員宿舎	朝食:ホームステイ 昼食:各自市内 夕食:ホームステイ	
			8:00~8:30	市内見学の注意					
			8:40~15:00	バディと市内見学	バス				
			15:00	バディとともに下校	バディと移動				
4 日目	10/27	木	7:50	バディとともに登校	バディと移動	ウィンダムガーデンホテル		朝食:ホームステイ 昼食:ハロン湾食堂 夕食:市内レストラン	
			8:00	打ち合わせ					
			8:15	ハロン湾観光出発					
			11:30~16:00	ハロン湾クルーズ・ティエンクン鍾乳洞見学	バス				
			19:00	市内レストランでお別れ会					
			21:15	ウィンダムガーデンホテル着	路線バス				
5 日目	10/28	金	8:30	ホテル出発	バス	機中泊		朝食:ホテル内 昼食:市内レストラン 夕食:市内レストラン	
			9:00~11:30	日本企業 鉄建建設訪問					
			12:00~13:00	市内レストランにて昼食					
			13:00~17:30	市内観光:タンロン遺跡・ロンビエン橋					
			17:30~19:00	市内レストランにて夕食・ショッピングセンターで買い物					
			20:20	ノイバイ空港到着					
			23:20	JL752便搭乗					ハノイ発
6 日目	10/29	土	6:30					朝食:機内食	
			7:30	成田空港で解散					

10月の訪越まで、牧野教諭にはJISとの交渉の間に立っていただいたが、その結果、思いがけなくもJISからホームステイの提案を受けることとなった。当初はホテルに4泊する予定であったが、ご厚意に甘んじて、2泊は生徒のご自宅に宿泊することとなった。その間、引率教員はJISの教員用宿舎にお世話になった。

3. 旅行の道程

10月24日（月）曇り

成田国際空港に15:00に集合。生徒は22名、引率は、齋藤晃教諭と大島の2名である。実は集合は無事というわけではなかった。日本人はベトナムへの入国にあたって滞在2週間まではビザが必要なかったが、ビザが必要な生徒が一人おり、3か月ほど前から旅行社を通じてビザ取得に動いていた。しかし申請が間に合わないということで、旅行社では手配できなかった。そこで、JISからベトナムの入国管理局に入国許可申請をお願いしたが、出発前日になっても許可が下りず、もう彼を同行させることができないのではとあきらめかけていた。しかし最終的には、出発当日の昼過ぎに、空港に向かう列車の中で牧野教諭からビザ申請の見通しがついたとの国際電話が入り、一縷の望みで待機させていた生徒本人に急遽空港に向かってもらい、なんとか合流させることができた。この生徒は、ハノイのノイバイ空港でビザを取得し、一緒に入国することとなった。

飛行機は、ほぼ予定通り現地時間21:50にハノイのノイバイ空港に到着した。降り立った途端、南国らしい湿気と生ぬるい空気に包まれた。空港を出たのはもう夜の11時頃と遅かったが、牧野教諭の出迎えをうけた。JISが手配したバスに乗り、宿泊するホテルに向かう。棕櫚の街路樹と黄色味を帯びた薄暗い街灯が、異国に来たことを感じさせる。宿泊場所のウィンダムガーデンホテルに到着したのはもう12時近かった。生徒は、疲労と車窓からの見慣れぬ風景のせいか、やや不安げである。部屋割りをししてすぐ就寝となった。

10月25日（火）うす曇り

朝8:00過ぎにホテルを出発、徒歩でJISに向かう。道路に出て生徒を圧倒したのが、通勤用のバイクの量とその運転である。東南アジアは総じてバイクが多いが、特にベトナムは多い。雲霞のごときバイクが、信号が変わる前から動き出し、信号が変わった後も前を横切る。牧野教諭からは事前に、交通ルールに従うという日本人的感觉は通用しないので、道を横断するときは、車やバイクが目の前を横切っても一歩踏み出す勇気を持つこと、横断中は一定の速度で歩き、絶対走り出さないこと、との注意を受けた。一定の速度で歩けば、車やバイクの方が歩行者を避けて走るとのことであるが、現地に就いたばかりの旅行者にとって、バイクが洪水のように押し寄せる中、道を横断することは命がけに思えた。

徒歩10分ほどで、何とかJISにたどり着くと、金文字の日本語で「教育で最も重要なのは、良い人格を育むことです」と記された白亜の建物が、我々を迎えてくれた。校舎に入り、早速JISの生徒さんにご挨拶、出迎えてくれたのは11年生、日本でいう高校2年生である。オンラインで対面済みとはいえ、生徒には緊張感が漂っていた。歓迎式でDao Viet Anh 副理事長、遠山信二校長から歓迎のお言葉を頂戴した後、生徒同士で学内の見学ツアーを行った。

JIS の学園内には、教室棟、体育館、運動場、プールが備わり、屋上には菜園が広がっており、ハノイの公立学校に比べると、はるかに良い施設が整っている。生徒の登下校には、保護者の送迎の他、マイクロバス十数台によるスクールバスが運営されている。また遠隔地から来る生徒のために、学生寮も用意されていた。

見学ツアーの後、生徒は幼稚園児と小学生に絵本の読み聞かせを行った。事前にベトナムは書籍に対する税関検査が厳重で、日本から本を送ってもらうのにも苦労があるというお話があったので、寄贈を前提に生徒には2冊ずつ絵本を持参するようお願いしていた。読み聞かせは不慣れなこともあり、苦戦した生徒もいたが、それぞれ創意工夫を凝らして挑戦してくれた。

4時間目は、ベトナムの生徒とともに実際に授業を受けた。JIS の高校生は、日本語自体を学ぶ授業の他、数学と理科は日本人教師によって日本語で行われていた。JIS の生徒と一緒に考えられるようにということで、数学と日本語の授業に参加させて頂いた。

昼食は、食堂で JIS の生徒の中に交じって同じ給食を食べた。メニューはカレーと青菜の炒め物、デザートに南国のフルーツであった。小学生に交じって食べた者もいたが、人気者となっていたようだ。

午後は10年生（高校1年生）も加わりスポーツ大会。JIS の先生が様々なゲームを工夫してくださり、最後はドッジボールで盛り上がった。午前中は会話もぎこちなかったが、運動には国境が無く、一気にお互いの距離感が縮まったように見えた。

汗を流した後、講堂に集合し、ホームステイのご家庭と対面式を行った。ホームステイ先のご家庭は、JIS 全体の中で依頼がなされ、小学校2年生から高校3年生まで13家庭が応じて下さった。参加生徒は22名であったが、2名一組を希望した生徒も多く、13家庭で丁度取まった。正直に言って、JIS からホームステイの提案を受けた時、不安感があった。生徒の中には海外旅行が初めての者もいたし、講座参加者はホームステイ前提で集まっていたわけではなかった。対面式の後、各ご家庭に分かれていく生徒の顔にも緊張と不安が読み取れた。しかし、各ご家庭では、温かく、また最大限のおもてなしを受けたようで、結果的には生徒には大好評であった。以下に示すのは、生徒の率直な感想である。

「ホームステイについてのお礼はいくら言っても足りません。見ず知らずの自分たちを歓迎してくれ、国を超えて生活することはとてもいい経験でした。水道水が飲めないことや湯船がないこと、そして最も異なることは料理です。衣食住で国によって一番変わりやすいのは食だと思います。その食がホームステイの家庭ではとてもおいしく、手が込んでいて温かさを感じました。英語で話すことも勉強になったし、夜街を一緒に観光したり日本では飲めないココナッツジュースを飲ませてくれたり、ほんとに自分たちを楽しませ

ようとしていて嬉しかったです。家もとんでもなく広くて心地よかったです、それ以上に歓迎の気持ちやもてなしてくれた気持ち、手が込んだ料理がとても嬉しかったです。ほんとに居心地も良く楽しかったです。」(G.S)

ご家族は基本的に日本語が話せないことも多く、コミュニケーションをとるのに苦労したようだが、むしろ英会話を実践する良い機会になった。ホームステイを受け入れて頂いたご家庭は、裕福なご家庭が多かったようで、豪邸と生活ぶりは、しばらく生徒の間で話題となった。夜に街中の観光に連れて行っていただいた生徒も多かった。各ご家庭のご配慮と歓待には、厚く御礼申し上げる次第である。

10月26日(水) 曇り

この日は、JISの高校生と5つの班に分かれ、ハノイ市内を散策して回る計画であった。こちらからの希望で気軽に提案したのであるが、提案してみるとベトナムでは結構大変なことであるとわかった。実は、ベトナムでは生徒のみによる班行動は、経験がほとんどない。東京では、JR、私鉄、地下鉄等の安定した公共交通機関があり、バス利用も問題がないが、ハノイは地下鉄が1本開通したばかりで、バスも渋滞の中で時間がかかり、時刻表もあつてないようなものである。市民はそのためバイクを愛用し、何処に行くにもバイクで移動する。家族や友人で出かける時も自家用車か自家用バイクとなる。生徒だけで公共交通機関を使って市内散策をしようとしても、移動だけでかなりの時間を浪費してしまう。そもそもJISの生徒さん自身が、そういう経験を積んではいないとのことであった。交流が深まるのではと思い提案したのだが、東京の感覚は通用しなかった。結局JISの方で考えて下さり、登下校用のスクールバスを市内散策用に班ごとに1台ずつ仕立てていただいた。

JISの生徒さんは、班ごとにそれぞれ創意工夫を凝らした散策メニューを考えてくれていた。風光明媚なホアンキエム湖の他、若者らしく流行りのアパレルショップや食べ歩き、またお皿造りのワークショップやジャンプアリーナという巨大トランポリン施設に行った班もあった。道すがらJISの生徒さんからハノイのことやベトナムのことについて教わり、学校内では得られない学びと交流の場となった。

10月27日(木) 快晴

この日は、ハノイ郊外のハロン湾クルーズに出かける日である。ハロン湾はハノイ市の東150kmほどにあり、南シナ海に面したベトナム有数の景勝地である。石灰質の地層が風雨によって削られ、大小3000ほどの島となり、海中より突き出している。1994年には世界自然遺産に登録された。我々は、JISに集合した後、JISの生徒さんとJISの釣先生、牧野教諭と

共に観光バスに乗って向かった。3時間ほどでハロン湾に到着。ハノイは薄曇りが続いていたが、現地は澄み切った青空が広がっていた。あたり一帯はリゾート開発が進み、巨大なホテルや白い別荘が立ち並び、勢いのあるベトナムの経済状況を感じさせる。すぐに遊覧船に乗り込み船上で昼食となる。料理はエビや貝、カツオのような尾頭付きの魚など、海鮮料理が中心であった。港を離れて1時間ほどで奇岩が立ち並ぶ島々に近づくと、生徒たちは甲板に出てワイワイ言いながら景色を楽しんでいる。途中ダウゴー島に立ち寄り上陸、島の中のティエンクン鍾乳洞とダウゴー鍾乳洞を散策した。100段ほどの階段を上ると、ティエンクン鍾乳洞の入り口が見えた。入り口は薄暗いが、入ってみると鍾乳洞の中は色とりどりのライトアップがなされ、明るかった。内部は広く、約30分の散策であった。普段は観光客でごった返す観光地のはずだが、コロナ禍の影響が訪れる人は少なく、落ち着いて鑑賞できた。生徒はこれほどの規模の鍾乳洞は初めてなのか、圧倒された様子であった。クルーズは4時間ほどで終了し、バスでハノイ市内に戻る。この日は、移動時間が多いものの比較的ゆったりと過ごすことになったが、出発以来ハードな日程が続いていたので、丁度よかったと思う。JISの生徒さんとは、今日でお別れである。大変お世話になったので、返礼の意味を込めて、夕食はJISの生徒さんをご招待した。JISのご配慮により、この三日間は濃密な交流の場となった。夜7時頃から始まった晚餐は大いに盛り上がり、なかなか終わることができなかったが、帰りの足のこともあり、名残を惜しみながら終了した。以下の感想には、三日間の生徒の思いが表現されている。

「JISに訪問して最初に驚いたことは、生徒の日本語力の高さです。私がZoomで話していた生徒達は主に11年生の子達ですが、それより下の学年の生徒も意思疎通を日本語で滞りなく行っていたことは本当に感心をしました。体験授業は数学の授業で、留学生試験の過去問を一緒に解きました。私が想像していたレベルよりもずっと高く、これから留学生試験を受けるであろうJISの子達に尊敬の念を抱きました。給食体験では、一緒に机になった小さな子達がとても気さくに話しかけてくれてとても嬉しかったです。スポーツ大会では中附生とJIS生が混合となり、ランダムな2チームに分かれて行ないました。よくスポーツは国境を超えと言われるそうですが、正にそのこと体感しました。2日目はハノイ散策を1日しました。私の班では最初に日本式のカフェに行き、そのあとお皿作りをして、最後に旧市街を散策しました。最後にバディの子がくれたお揃いのプレスレットは今でも大切に着けています。交通量の多いハノイですので、慣れない中附生だけでは十分に回ることが出来なかったと思います。ドライバーの方と一緒に回ってくれたバディの子達にはとても感謝しています。3日目のハロン湾では完全に友達となったJIS生と沢山話したり、写真を撮ったりしていました。最後のレストランでは、お別れするのがとても名残惜しく

なりました。4月から、ずっと Zoom で話していたとはいえ、直接あったことはなかった
ので訪問当初は不安も少々ありましたが、JIS の皆さんが暖かく迎えてくれたおかげで
とても楽しく感じました。」(F.H)

10月28日(金) 晴れ

ハノイ最終日の28日は、研究旅行のもう一つの目的であった、日系企業訪問を実施した。
訪問先は、JISにご紹介いただいた「鉄建建設」の事業所と作業現場である。「鉄建建設」は、
ハノイ市エンサ地区の下水道整備事業に携わっている。現在ハノイ市では、7割の廃水が直
接河川に放流され、水質汚染の大きな要因となっているが、日本のODAによって建設中の
エンサ下水処理施設が完成すると、劇的な水質改善が期待されている。

我々は、「鉄建建設」の事業所で下水道整備事業の全容について説明を受け、作業現場で
は具体的な作業工程についての解説を受けて見学させていただいた。事業所から見学地まで
は徒歩10分ほどであったが、途中バイクや自動車が行きかう中、生徒が安全に作業現場ま
でたどり着けるよう、事業所の方々が道路側に沿って付き添っていただくなど、多くのご配
慮をいただいた。現場は、トーリック川沿いにあり、川は薄汚れ悪臭を放っていた。下水道
整備事業は、「鉄建建設」の高度なトンネル掘削技術を用いて行われていた。整備事業が完
成すると、ハノイ市全体の3割ほどの廃水処理が可能となり、目の前の汚れたトーリック川
も魚が戻ってくるという話に、生徒は感銘を受けていた。事務所に戻った後、「鉄建建設」
ハノイ事務所の本島浩孝所長、張俊業 Project Manager、相澤昌幸 Deputy Project Manager から、
さらに「鉄建建設」の海外での活動について説明を受けた。また、「鉄建建設」のご高配に
より、JICA ベトナム事務所の Phan Le Binh 氏、在ベトナム日本国大使館の鳥山仁書記官に
もご同席いただき、日本のODAの果たしている役割や、JICAによるプロジェクト支援体制、
日本大使館の業務内容と国際人として活躍した先人たちの紹介、国際人としての視野の在り
方などについてお話を伺うことができた。生徒からの質問に対しても、ご丁寧にお答えい
ただいた。「鉄建建設」の皆様、JICAのPhan Le Binh氏、大使館の鳥山仁書記官には、お時間
を割いていただき厚く御礼申し上げます。以下、生徒の感想をいくつか紹介したい。

「ベトナムに行って、一番に感じたことは水周りの環境が日本とあまりにも違いすぎる
な、ということでした。水道水が飲めない、トイレの環境も全く違う。その環境を、改善
していく最前線にいらっしゃるのだということを実感し、かっこいいと思いました。もし、
時が経って私がまたベトナムに行った時、その時はあの川が綺麗になって上下水道が設備
されているかもしれないと思うと本当にすごいと思いました。」(S.I)

「ベトナムは10月下旬にも関わらずとても暑く、その中で長袖で一生涯懸命働いている鉄

建建設の皆さんを間近でみて、世の中をかげで支えてくださっている人がたくさんいるんだなと改めて感じました。また、建設現場で働いている女性もいること、そして会社側の女性を受け入れる体制が整っていることに驚きました。女性もやりたいことができる、社会の役に立てるような体制が素晴らしいと思いました。実際に鉄建建設で働いている女性の社員の方ともお話することができて良かったです。」(H.Y)

「現場近くの川を見ていたが、生活汚水がそのまま流れていて、川の流れもかなり穏やかだったためほとんど死んでいるようなものだった。そのような川の環境を改善するために下水整備事業を実行していたが、その説明の中で一つ印象的な言葉があった。“30年前の隅田川は今のベトナムの川のように汚水で塗れていた。しかしこの30年で水質はとも改善されたので、ベトナムの川も綺麗になることは確信しています”私はそれを聞き、鉄建建設が水環境汚濁の課題に真摯に向き合う姿勢と成功する自信に感銘を受けた。」(Y.S)

「公民の授業でなんとなく JICA の存在は知っていたものの、具体的に JICA が何をしているのか私はお話を伺うまで詳しく知りませんでした。私が感銘を受けたのは、開発途上国に対して、ただ支援をするのではなく、有償資金協力などで自国の経済力をつけさせるというところがありました。私は開発途上国を救う手段として無償資金協力のことしか頭になかったのでお話を伺って視野が広がった気がします。また、お話を伺ってつくづく私は日本に生まれて幸運なんだなということです。世界の人口の約八割が発展途上の国で暮らしていると資料には書かれていました。私は開発途上の国に暮らす人々がそんなにも多いなんて気づきもしませんでした。それと同時に日本に来て必死に勉強して、今は祖国ベトナムのために粉骨砕身しておられる Binh さんには、とても尊敬の念を抱いています。お忙しい中私達のために説明をしてくださり、誠にありがとうございました。」(F.H)

「JICA の方からは、私がいままで知らなかった JICA の業務や、日本がベトナムに行ってきた国際協力についての話を詳しく聞くことができました。日本のベトナムに対する援助の話を書く中で、私は、日本がベトナム全土において様々な形で支援をし、港や空港や発電所などを多数建設していることに興味を持ちました。日本の技術と支援がベトナムの発展に貢献しているのは、とても誇らしいことだと感じています。これからも JICA を中心にベトナムへのさらなる援助が加速し、両国関係が深くなることを期待しています。」(A.T)

「大使館という言葉は聞き馴染みがあったけど、具体的なことはあまり知りませんでした。貿易や政治についての取り決めなどに関与していると知って、大使館は他国同士を繋ぐ上で重要な役割を話しているんだなと思いました。また、偉人を通して国際化についてのお話も聞けました。その偉人たちは日本にいながらでも外国との関わりを持ってい

ました。また、鳥山さんは国際化において重要なのは、その国の言語を話すことではないと言っていました。国際化とは、現地に居て その現地の言葉を話さなければいけないのではなく、必要なのは関わろうとする意志だと知りました。私も今回の研究旅行をきっかけに、外国にさらに意識を向けてみようと思います。」(A.Y)

「大使館というのはビザの発行や外交をしている、というイメージだったので、貿易や投資、日本企業の支援や文化広報、日本留学や日本語教育までやっていると知って驚きました。国際化とは何か、というお話で、比べることで自分の世界、考え方を広げることと仰っていたのを聞いて、なるほど、と納得しました。国際化とは何かと聞かれた時、私はどの国の人も同じように話せる、国境を感じさせないコミュニケーションを取る、国関係なく仕事が出来るといことだと考えていました。なので、新しい視点を獲得することができました。」(S.I)

午後は、市内観光でタンロン遺跡とロンビエン橋を訪れた。タンロン遺跡は、7世紀から19世紀まで、北部ベトナムの政治的中心であり続けた場所で、特に11世紀初頭から19世紀初頭までは、歴代王朝の首都が置かれていた。現在は世界文化遺産に登録され、遺跡の内部分では発掘調査が続いている。城内の地下には、ベトナム戦争時代に司令部が置かれていた地下壕が残されており、見学可能である。ベトナム戦争は、老齡の私にとっては少年時代に日々のニュースで触れていた話題であるが、生徒にとっては教科書の一頁でしかない。訪問前に、調べ学習の中でベトナムの歴史やベトナム戦争に触れた部分もあったが、生徒はピンと来ていない様子であった。ここは、事前学習でもう一工夫必要な部分であると感じている。

ロンビエン橋は、紅河にかかる古い鉄橋である。植民地時代の1902年にフランスの技術指導で架けられ、現在も鉄道が通る現役の橋である。鉄道の他、人やバイクも渡れるようになっている。バイクがビュンビュンと脇を通り過ぎ、狭い歩道に敷いてあるコンクリートの板は劣化して穴が開き、橋の下がのぞけるような状態で、大変スリリングであったが、生徒にはそのスリルの為か、評判が良かった。最後に大型のスーパーマーケットに寄り、土産物を購入し、ハノイを後にした。

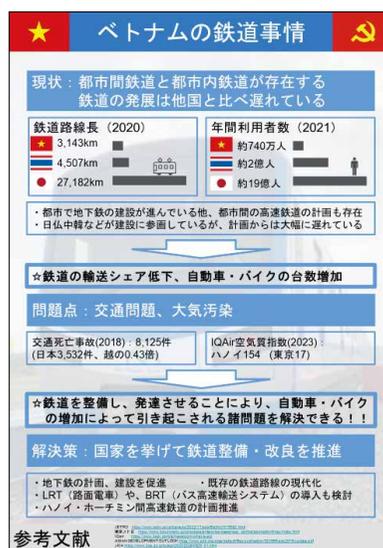
終わりに

今回の研究旅行では、二つの目的「現地校を訪れ同世代の高校生と交流を行う」、「日系企業を訪れ、その活動ぶりに触れる」を掲げていたが、とりあえず達成することができた。相手の高校生が、日本語を学んでいる高校生という特殊な状況であったため、日本語を主とする交流となった。英語を使う環境を求めるときというご意見もあると思うが、数日の短い期間の中では、片言の英語ではなかなか会話が進まず、実質的な交流は難しい。言葉の壁が低

いことで、今回は異国の高校生と深みのある交流を図ることができた。また、「鉄建建設」訪問では、海外で活動する企業戦士の思いを感じ取ってもらえた。生徒の感想からは、日本企業が単なる利益の追求だけではなく、現地社会への貢献の意識や生活向上への使命感など、高い志を抱いて活動していることが伝わったことが読み取れる。また海外での企業活動を支えるために、JICA や大使館が様々な支援の枠組みを構築してサポートしていることを知る良い機会となった。

そして何よりも、生徒は海外に出たことで、日本を見つめなおすきっかけを得た。到着して早々、生徒はコンビニや自販機を探し、なかなか見つからないことに戸惑っていたが、こうした体験を通して、普段の日本の生活が世界の中ではあたりまえでないことを実感したはずである。帰国後、ベトナムについて再度テーマを決めてレポートを書いてもらい、さらに2月15日に実施した教養総合成果発表会において、ポスター発表を行った。こうした発表の多くは、ベトナムと日本との違いに着目した内容であった。生徒の発表テーマは、次のとおりである。

- ・ベトナムの食文化と安全性
- ・ハノイと観光
- ・ベトナムと日本の鉄道事情
- ・ベトナムの伝統的流通の危機
- ・ベトナムのコンタクト使用率
- ・ベトナムの交通ルールとその特徴
- ・国際化とは～発展途上国から先進国へ～
- ・ベトナムの鉄道事情
- ・ベトナムの金持ちはなぜ金持ちなのか
- ・ベトナムの環境問題
- ・ベトナムの治安について
- ・ベトナムの自動車産業



生徒たちが、今回の研究旅行で異国の生活と文化に触れ、関心が少しでも国外に向き、旅行の体験、そして感じたことを今後の人生の中で活かしてくれることを願っている。

この旅行では、JIS で研修中の牧野良介教諭には、企画段階から大変お世話になっている。この場を借りて感謝申し上げたい。最後に、我々の受け入れを許可して下さった JIS の Dao Xuan Hoc 理事長、遠山信二校長、ホストファミリーの皆様、鉄建建設の本島浩孝所長には厚く御礼申し上げます。



日本国際学校 (JIS) の校舎



期待と不安の対面式



Dao Viet Anh 副理事長から歓迎のご挨拶



児童に絵本の読み聞かせ



一緒に数学の問題に挑戦



ベトナムの給食は、美味しいかな？



スポーツに国境はありません



みんなで集合写真



ホームステイでの晩餐、大歓迎を受けました



ハロン湾、ダウゴー島に上陸です



お別れの夕食会、3日間お世話になりました



鉄建建設の作業現場、日本企業の活躍に触れました



海外での企業活動の枠組みを学びました



質問タイム、丁寧に答えいただきました



タンロン遺跡、1000年近い古都です



ロンビエン橋にて、スリリングな見学でした

